紀北納税貯蓄組合連合会会長賞

税金と私の未来

和歌山県立古佐田丘中学校　三年　木村　百香

去年の夏、私は紀の川市の取り組みである、韓国済州島の西帰浦市との交換留学に参加した。初めて海外に行くことになり、楽しみな気持ちと同じくらい、不安な気持ちも大きかった。言葉は通じるのだろうか、文化の違いで戸惑うことはないだろうか、そんな心配を胸に飛び立った留学だったが、現地で待っていたのは、予想をはるかに上回る充実した毎日だった。

現地では、同世代の韓国の学生たちが温かく迎えてくれた。お互いに片言の日本語や韓国語、そしてときには英語を交えながら交流し、気がつけばたくさんの友達ができていた。食文化の違いに驚いたり、学校生活の仕組みを比べて話し合ったりする中で、「違い」を楽しみながら学ぶことができた。日本にいるだけでは味わえない経験を通して、自分の世界が大きく広がったと実感できた。

留学を終えて帰国した後、母とその時の出来事を話していた。私はふと「そういや、やけに留学費用が安かったなあ。」と口にした。すると母は、「紀の川市が税金から半額出してくれてたんやで、ほんまに助かるわなぁ。」と答えた。その言葉を聞いた瞬間、私はとても驚いた。あれほど貴重でかけがえのない体験ができたのは、市の支援、つまり多くの人が納めている税金のおかげだったのだ。

それまでの私は、税金に対して良い印象を持っていなかった。ニュースで「税率が上がる」と耳にすれば嫌な気持ちになり、買い物をするたびに払う消費税に「なくなればいいのに」と不満を抱いていた。ところが、留学費用の一部が税金で支えられていたと知ったことで、その考えは大きく揺らいだ。

よく考えてみれば、税金はさまざまな場面で私たちの生活を支えている。学校で勉強ができるのも、病院に安心してかかれるのも、税金があるからこそだ。

そして今回の留学のように、未来を担う若者に新しい経験の場を与えることにも使われている。私はそれまで、その「使い道」をきちんと理解していなかったのだ。

自分がその恩恵を受けて初めて、「税金は誰かの未来を支える力になる」と気づいた。もちろん、税金を納めることが時には大きな負担に感じられることもあるだろう。しかし、そのお金が確かに人の役に立ち、社会をより良くするために使われているのだと理解できれば、少しは前向きに受けとめられるのではないかと思う。

今回の留学を通して私は、税金に対する見方が大きく変わった。税金は決して遠い存在ではなく、私たちのすぐそばで生活を支え、未来をつくっている。

これから大人になり、働いて自分も税金を納める立場になったとき、今回の気づきを忘れずにいたい。そして、自分が払う税金が「誰かの未来を応援している」と思えるような大人になりたい。